

福島県東京事務所 伊藤所長が、本県を応援くださる企業の方々と対談する企画が始まりました。第1回目のゲストは、武田薬品工業（株）CSR部門の吹田博史さん。福島県への復興支援のきっかけや取組みなどを伺いました。



○写真（左）
武田薬品工業株式会社
コーポレート・コミュニケーションズ
&パブリックアフェアーズ CSR
企業市民活動・寄付担当部長
吹田 博史さん

○写真（右）
福島県東京事務所長
伊藤 直樹

伊藤： 福島県は、これまで企業を始め様々な人たちから共感、共鳴をいただき支援を受けてきましたが、今年度からさらに一歩進め、協働の気持ちで皆さんと一緒に風評対策や情報発信に取り組んでいます。協働という観点でお話しを聞かせてください。

はじめに、福島県を始めとした被災3県への復興支援に取り組んだきっかけをお聞かせください。

吹田： 3月11日は東京で勤務していて、ちょうど会議中でした。大きな揺れが収まって、東京本社内に緊急支援本部を立ち上げたことを思い出します。また、社内で阪神・淡路大震災を経験した人たちから情報収集し、今回の震災では復興するまでかなり時間がかかりそうだ、もしかしたら10年以上かかるかもしれない、長期にわたる支援が必要になるだろうということを本部内で話し合いました。

3日後の3月14日には義援金の話をまとめ、タケダとして寄付金や医薬品の提供以外に何ができるかについて、ホワイトボードを使って、横軸に緊急、復旧、復興の時間軸を、縦軸にはタケダのアセットというマトリックスを描いて、長期に支援していくために何が必要か、時間とともに変化するニーズに合わせてどういった支援ができるのかを検討していくということになりました。

	緊急	復旧	復興
モノ	医薬品の提供	→ ストレッチ	
カネ	義援金	↘ ストレッチ	
ヒト	↓ ストレッチ		
その他			

【マトリックス】

伊藤： 長期に支援していくための検討をしていくことになったとのことですが、タケダの社風として、社会貢献をどのように考えていたのかお聞かせください。



吹田： タケダは今年で創立 237 年という長い歴史を持つ会社です。今日まで会社が存続しているのは、陰徳陽報などの考えもあって、社会と上手にお付き合いをしてきたからとも言えます。

一方で、社会への貢献を外部に開示することをあまりよしとしない気質でもありました。そのような中で、当時経済同友会の代表幹事に内定していた長谷川社長（現相談役）から、日本の会社として何ができるのか考えてみよう、と、従業員全員にメッセージが発信されました。その結果、自然発生というよりはトップの一言によって CSR の部署に多くの提案があり、会社全体が私たちに力を与えてくれました。

伊藤： 東日本大震災は、地震、津波、原子力災害、風評という複合災害でした。時間の経過とともに、道路や拠点となる施設等のハードの部分は、着々と復旧・復興を成し遂げてきておりますが、未だに県内外に 4 万 5 千人もの県民が避難している現状があります。

また、風評では、消費者庁の最近の調査では、12%もの方々が福島県産というだけで敬遠するという結果もあります。時間の経過とともに記憶から薄れてくる風化も進んでいますので、まだまだ復興に向けて頑張っていかなければなりません。

そこで、タケダの福島への復興支援の取組内容についてお聞かせください。

吹田： 福島県をはじめ、被災された方々および被災地に対して、様々な側面から支援しています。その中で、代表的なもの 3 つを挙げると、1 つ目は復興支援企業内マルシェがあります。

2011 年 5 月から開始しこれまでに全国の事業場で 50 回以上開催してきました。

キーワードは 3 つの「お」。東北の物産は「おいしい」、現地に行けなくても手に入れることができ「お得」、楽しみながら買い物ができる「おもしろい」が従業員に浸透するよう取り組みました。

今はもう一つの「お」、マルシェを実施することで被災地を忘れない「思（おも）い出す」が加わっています。

タケダの復興のテーマは「私たちは 3 月 11 日を忘れません」としていますので、今年も 9 月には大阪工場と、湘南ヘルスケアイノベーションパーク（旧名称：湘南研究所）、10 月には東京の武田グローバル本社でマルシェを実施します。

2 つ目は、寄付による長期的な支援です。現在、日本



【復興支援企業内マルシェ】

NPO センターさんとの協働事業「タケダいのちとくらし再生プログラム」を実施しています。被災3県の民間団体を支援していて、福島県内の団体も多数あります。

3つ目は、被災地研修です。CSRの部署だけが復興支援をするということではなく、従業員一人ひとりがどういった支援ができるかを考える機会を提供すること、そして実行に移せることについて検討しました。そこで出た結果が研修というスキームです。

伊藤： 8月24日～25日、福島県を訪問いただいておりますが、この研修は何がきっかけとなったのですか。

吹田： 毎年3月11日前後に東京の本社で従業員を対象とした社内フォーラムを開催しています。2016年3月に実施したこのフォーラムに、浪江町から二本松市に避難している就労継続支援B型事業所「NPO 法人コーヒータイム」の橋本由利子理事長にご参加



【コーヒータイムでのワークショップ】

いただいた際、会場から「私たちができることは何ですか」という質問に対し、橋本理事長は「来てください、ぜひ福島を見てください。」と発言されました。

そこで、質問をしたビジネスユニットの従業員が行ってみようということになり、私どもCSRの部署と一緒に検討して「被災地交流・支援研修」が実現しました。ボランティア活動として、タケダが支援している「NPO 法人福島県有機農業ネットワーク」で田んぼの雑草取りをするとともに、支援先訪問として、「コーヒータイム」、南相馬市で震災以降放射線を計測している「放射能測定センター・南相馬」、さらに課題解決に取り組んでいる「株式会社小高ワークスベース」にも伺って代表のお話を伺いたいと

いうこととなり、座学、ボランティア、支援先の訪問、現地交流などを組み合わせた研修プログラムができあがりました。

伊藤： 研修後の皆さんの声をお聞かせください。

吹田： 「自分たちが行ってエネルギーを受け取った」、「復興にあたっている方々、地道にやっている方々を見て、自分を見直すきっかけとなった」、「応援しに行ったのに、応援してもらっているという気持ちになる」など、多くの従業員がプラスのエネルギーを受け取って帰ってきています。

伊藤： その方々の仕事に対する心境の変化をお聞かせください。

吹田： 「できない理由を見つけるのではなく、どうすればできる方法があるのか、真の原因は何か考えることが重要である」という感想がありました。研修の目的は何かと考えたときに、知識やスキルは会社で学ぶことはできますが、意識を変えることは現場に行くしかありません。そして、意識が変わると行動が変

わる、このことが研修の大きな目的でもあるのです。

伊藤： 吹田部長は福島県に何度も訪問をされています。復興が進んでいる部分、未だ課題を抱えている部分がありますが、アドバイスをいただけませんか。

吹田： 前回の社内フォーラムで元復興庁事務次官の岡本全勝氏が「ハードの部分はできた。ソフト事業はこれからです」と発言され、その話を聞いてなるほどと思いました。福島県に行くとハードの部分は整ってきていて、避難指示が解除された地域も増えてきました。一方で、まだ人が立ち入れないところもあります。

これからも、支援の必要性を発信することや、「この町のここを見に来てほしい」と具体的に伝えることが重要なのではないのでしょうか。

伊藤： タケダとして今後、福島県にどのような形で関わっていくかお聞かせください。

吹田： 2020年度末まで、タケダは発災後10年間支援することをコミットしています。福島県は、(岩手、宮城と比べて)もう少し時間がかかると思われまので、コミット以上に支援が必要ではないかと考えています。また、従業員が関心を持ち続ける仕組み、マルシェや研修、これからはCSR部門だけではなく、危機管理の部門なども含め、全社的な取り組みを進めていければと思います。



伊藤： 従業員の気持ちを根付かせるように取り組んで、その延長線上に福島を含めて全国の被災地支援がある、それが会社の存在意義だと。

吹田： 被災地支援も含め、CSRの取り組みを通じて従業員が誇りを持ち続けられる会社でありたいと思っています。どのような取り組みをすれば、従業員は誇りを持つことができるのかを常に検討しています。

タケダは「ビジョン2025」を掲げており、「タケダは世界中のあらゆる人々のニーズに貢献しています。タケダイズムを通じ、社会やタケダの医薬品を必要とする

方々からの信頼を得ています」とあります。社長のクリストフ・ウェバーは社会から信頼を得ている会社になりたいという強い信念を持っています。

社会から信頼を得られるよう、被災地支援に取り組んでいくことは、このビジョン2025に合致することと考えています。最終的には、タケダが持続可能な企業であり、タケダの取り組みが持続可能な社会に貢献していくという一連の流れとなって初めて、従業員は会社に誇りを持つものと考えています。

伊藤： 福島に行ったり、見聞きしたりして、一番印象に残っていることをお聞かせください。

吹田： 今回（平成 30 年 8 月）の研修でも行った南相馬市小高区です。最初に訪問したときは、まだ避難解除がされていない頃で、誤解を恐れずに申し上げますと「町に音しがたい」と感じました。

次に訪問したとき、車の走る音と聞いたのです。人が戻るというのはこういうことなんだと鳥肌が立つ思いでした。

3 回目の訪問では、中学生や高校生が歩いているのを見ました。我がことのようにうれしくなりました。定点観測ではありませんが、毎年訪問しているからこそ、変化を五感で感じることができなのでしょうね。このことが一番印象に残っています。



【南相馬市小高区 of 双葉屋旅館訪問】

伊藤： 最後に、福島県にメッセージをお願いします。

吹田： 福島県は懐が広く、私たちのような外部の者を受け入れてくださいます。一方で、支援者という「よそ者」が入ってくることによって、これまでの福島県の秩序を壊していることがあるかもしれません。そのような状況でも受容してくださるのは、おおらかで温かい方が多いからなのではないかと感じています。これからも、福島県から多くのことを学んでいきたいと思えます。最後になりますが、私たちはこれまでも、これからも、福島県に「応援」のメッセージを送り続けます。

伊藤： お話しにもありましたように、福島県に来て、食べて、見てもらうことが一番の復興支援となります。これからも様々な場面で御協力いただけたら嬉しいです。ありがとうございました。



吹田 博史さんプロフィール

1988 年 4 月武田薬品工業株式会社入社。医薬営業本部、化学用品事業部を経て、1998 年から 10 年間労働組合専従。その後、社長室にて政策秘書業務に従事した後、2010 年に CSR 部門の立ち上げと同時に異動、現在に至る。